

Senri & Osaka International Schools of Kwansei Gakuin

# InterCulture

Summer 2017



149





12



17



28

関西学院千里国際中等部・高等部  
Senri International School of  
Kwansei Gakuin (SIS)

関西学院大阪インターナショナルスクール  
Osaka International School of  
Kwansei Gakuin (OIS)

〒562-0032  
大阪府箕面市小野原西4-4-16

4-4-16 Onohara-nishi,  
Minoh-shi, Osaka-fu,  
562-0032 JAPAN

TEL 072-727-5050



OIS class of 2018 (G11) are welcomed by students of the SOIS School of Hope as they visit as part of their service trip to Cambodia.

SOIS students and community raised over a million yen to allow for more improvements to be made to the school.





# 翼をつけたSOIS スピリッツ 千里 の外を飛びめぐる



SIS校長  
井藤 眞由美

SIS卒業生のパワフルな行動力と母校愛に脱帽である。

先日、FacebookにSIS卒業生2期生の谷口浩史氏が「SOIS Alumni Association千里国際同窓コミュニティ」という非公開ページを立ち上げられた。開ページから1日半でメンバーが800人を、7日目には1400名を超えるという驚くべき勢いで拡散し、メンバーを増やしている。

SISでは卒業時に入会する「同窓会」があるが、学年ごとの交流などは活発な様子であるものの全体の「同窓会」は、2011年の20周年記念行事を最後に開かれていなかった。学校としても同窓会を活性化し、現役生との繋がりも太くしていきたいということを今年度の目標の一つに掲げ、田中教頭が中心となってSISの同窓会代表と連絡を取り、3月には「総会」を開くことを決めた矢先であった。

SOISの同窓会コミュニティは、もちろんスピリッツ面では誰もが「地球市民」であるが、物理的にも地球上の様々な場所に住んでいる人の集まりである。学校が今年度再スタートを切った動きと、このコミュニティのコラボにより、間違いなく他のどこにもないSOISならではの同窓会コミュニティが育っていくであろうと思うと楽しみで仕方がない。このFacebookページそのものには、現役SIS生徒の皆さんはまだ入会はできないのだが、現役SIS生に役立つ企画もたくさん生まれることは間違い無いと思う。どうかお楽しみに。そして卒業後に入会できる日もお楽しみに。

実は私は今この文を中国の広州という場所で書いている。帰国子女財団主催のアジア5都市

での学校説明会に参加しており、ジャカルタ、シンガポール、バンコク、広州、香港に住んでおられる方にSISのことを伝えるという楽しい時間を過ごしている。広州に去年引っ越された来住朋哉くんのご家族と再会して近況を聞いたのも嬉しいひと時であった。学園祭当日学校にいらなかったのは非常に残念であったが、SIS現役生の「ミステリー」をテーマにした学年・クラスの取り組みも、そして初参加となる同窓会ブースの大盛況の様子も、たくさん飛び込んで来る写真で楽しませてもらっている。

ここに来るにあたってSISの現役生・卒業生でアジアの各都市に住んでいたことのある人リストを用意してもらって持参している。それぞれの都市でこのリストを見ながら「ああ、そうだったんだ、〇〇さんはこの地にいたんだね」と現役生のことを思い、卒業生たちのことを懐かしく思い出しながら、「帰国したらぜひSISに入学したいんです」と言ってくれるアジア在住の人たちと語り合っていると、そして、世代を超えて繋がっている様子の卒業生と現役生の学園祭の写真を眺めていると、現在・過去・未来・・・ふと自分が今の時代にいるのかわからなくなり、時間も空間も超えての「SOISスピリッツ」が翼はためかせて地球を駆け巡っている感覚の中に浮遊している。

タイトルに使わせてもらったのは、幕末の志士高杉晋作が、熱望していた海外視察に（実際に行ったのは上海）旅立つ3年前に書いた、和歌「翼あらば千里の外も飛びめぐり よろづの国を見んとしぞ思ふ」

へのオマージュである。今年は高杉晋作が亡くなって150年になるそうだ。

## ハーバードでの 教育研究会議に 参加して

ハーバード教育学部大学院内の教育研究団体Global Education Innovation Initiative (GEII)の世界大会「多様で急速に変化するこの世界での教育」に参加してきた。GEIIは、レイマース教授が中心となって、イノベティブな教育実践に関するリサーチやリーダー研修を行い、教育改革に関心を持つ教育関係者のための世界規模のネットワークを作ることによって21世紀教育の推進を図っている。5月8～10日の3日間実施された世界大会には、まだ肌寒いボストンに世界中の25カ国から250名を超える教育関係者（研究者、政府の教育機関職員、公立・私立の教育現場の管理職、教育NPO/NGOの職員など幅広く）が集まり、熱い議論が繰り広げられた。

私がこの大会に参加することになったのは、文部科学大臣補佐官の鈴木寛氏からお誘いをいただいたからだ。大会では日本の発言を強めることとともに、今回の世界大会参加の予習教材でもあった、GEIIの最新研究書「Teaching and Learning for the Twenty-First Century: Educational Goals, Policies and Curricula」において教育改革のフレームワークが比較研究された6カ国（チリ・中国・インド・メキシコ・シンガポール・アメリカ）に次いで、日本が七つ目の国となることを提言する――。この二つの目的を持って「チーム日本」が結成されることとなり、ここに、関西学院の代表として、さらにはSIS校長として、二つの立場で参加するようにと、法人から派遣していただいたのである。

前者の立場からの報告としては、日本が七つ目の国として加わり、比較研究をすることが決まった。また、これとは別に、日本もチームの中心として

アクションリサーチを検討することになり、詳細はこれからであるが、OECDイノベーションスクールの紹介や日本での実践知識の共有方法には、各国からも関心が寄せられた。SIS校長としては、今年度「カリキュラム・ティーチング・ラーニング委員会」を立ち上げ、次の25年を見据えてSISのカリキュラム整備に向けて動き始めているため、そこに寄与できる情報を持ち帰ることができたと感じている。

この大会に参加のあった25カ国は、いわゆる先進国と発展途上国が混在していたが、急速に変化する21世紀のこの時代に生きる子供たちに習得してもらいたい力として考える方向性に相違はない。頻繁に使われるキーワードは同じだ。またそこにかける情熱も共通している。特に印象的であったこととして、国を挙げての教育改革の推進が見られる国と、NGO/NPOが公教育を大きく動かす力となっている国との社会構造の対比は明確である。しかし、前者の代表と言えるシンガポールの教育長の、教育を動かしてきた自負と国や国民への熱い想い、後者の国の教育者たちが一様に「政府の理解が欲しい」と訴えながら、中退率の高い学校の子供達をいかに動機付けて卒業まで支えるかの実践報告とそこに込められた信念……教育への熱意は万国共通である。また、教育議論の行き着くところには、デモクラシーや世界平和がある。世界中から集まった教育関係者が、目の前の子供達のために、自国のために、そして世界の平和のために教育の力を信じて取り組んでいる、その想いを共有しあえる場に存在できたことは、私個人にとってもこの上ない研修となった。





Osaka International School of Kwansei Gakuin  
関西学院大阪インターナショナルスクール  
Senri International School of Kwansei Gakuin  
関西学院千里国際中等部・高等部



## Two schools under one roof



Bill Kralovec  
OIS head of school

When I came across the title, “Two Schools Under One Roof” in some reading I was doing, I immediately thought of the Senri & Osaka International Schools “Two Schools Together” philosophy. The Two Schools Under One Roof (TSUOR) is a policy of some government schools in the south-east European country of Bosnia & Herzegovina (BiH). When Yugoslavia broke up in the early 1990s, the Croats and Bosniaks went to war. In 1995 after peace was declared, many schools used the TSUOR policy. It may sound similar to our ethos, and it is true that we are two schools under one roof, but it is much different. Bosniak and Croatian children share the school building, but they are completely separate schools. Some schools even have separate entrances. There are two faculties and administrations, and there are no shared classes or extracurricular activities.

Memories of the war have separated Bosniak and Croatian families, and twenty years later, the communities in BiH do not mix together. I understand the resentment, but the next generation, who were born after the war, are being taught separately, which will not heal the community. It does not make for a bright economic future for them to still have these separations. I think of the challenges having two distinct cultures and systems in such close proximity. It is easier in some respects, to manage a school without thinking of another school. They do things their way, we do things our way. Pretty straightforward. However, life is not like that and the developing intercultural competence and having one’s views challenged, the spirit

of compromise, and looking for common ground, are all wonderful things that are missed out with separate schools.

The founders of SOIS intentionally formed the school with the challenge of “exchanging ideas” and “explore ways to come together” and that by “finding common ground between Japanese and non-Japanese practices, beliefs and traditions” intercultural understanding should be “modeled, studied and celebrated.” The zeitgeist of this century is one of fearing or isolating oneself from different cultures. The mission of our schools is to go directly against this. We still value our own beliefs about education, however, we also are open to seeing that others can be right as well.

I think the Bosnia can learn from SOIS and it is my hope they move from “two schools under one roof” to “two schools together”. Both schools benefit from the close relationships.



## SOIS School of Hope

I was amazed to learn that the SOIS community started a school in rural Cambodia! This came to my attention as the grade 11 students are preparing for a service trip to the SOIS School of Hope near the village of Kamchay Mear in Prey Veng province in southern Cambodia.

The OIS senior class of 2009 led the community in raising \$13,000 US dollars to construct a new school building. SOIS activities director Peter Heimer and OIS teacher Tara Cheney were senior class advisors then. Ms. Cheney recalls that “the students wanted to stretch themselves, to leave a legacy. The idea of working to provide an education - perhaps the greatest gift of all - to less fortunate students got everyone excited.” The fundraising project was called “schools2schools” and the money was given to the Tokyo-based nonprofit American Assistance for Cambodia. The SOIS School of Hope began as four-classroom building with little more than wooden desks and benches, chalkboards, a latrine, and two wells.

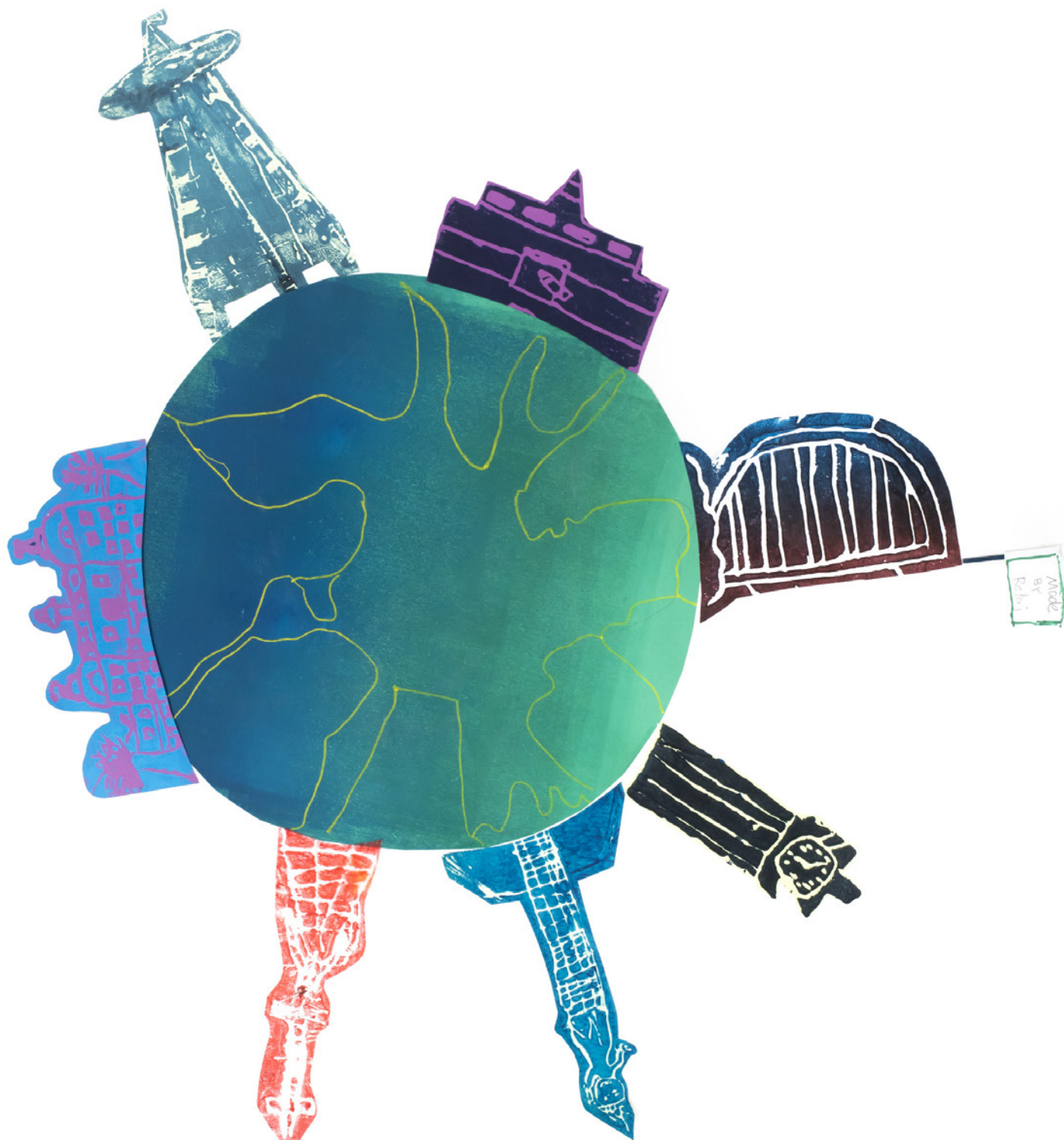
Since the SOIS School of Hope opened in March 2009, more funds have been raised to fund solar panels, computers, English teachers, sports equipment, and clearings for a soccer field and volleyball court. Over the years, OIS elementary students and SIS

grade 7 students have raised awareness and funds for the school. Heimer and former OIS teachers Karen and Jeffrey Killmer visited the school in March 2010 for an official opening ceremony. In July 2010, former OIS science teacher Gerard Coleman volunteer taught at the school, living in basic conditions. The January 2010 IB World magazine featured a short article about the school building efforts. In May 2015, OIS seniors traveled to Cambodia and became the first SOIS student group to visit the SOIS School of Hope. Electricity recently arrived to the nearby village and SOIS has donated funds to help the school connect to the electricity grid.

Service is a component of CAS, Creativity, Activity and Service, and is one of the core requirements of the International Baccalaureate Diploma Programme (IBDP). The rights, dignity and autonomy of all those involved are respected. The SOIS School of Hope raises our students’ awareness of the challenges of poverty and the power of education.

This year’s grade 11 student visited Cambodia and the SOIS School of Hope for their service trip, where they met and interacted with many of the students at the school. You can read about this and the bigger project involving the wider community on page 14.







# SOIS EARTHWEEK

## SOIS アースウィーク

Words by:  
SIS G12 的場健吾 酒井希実

アースウィークとは、環境保護へ積極的に取り組み、すべての人々が地球環境を大切にしようという意識を強めていくための週間です。生徒達の行うアースウィーク活動は前年までは主にOISコミュニティで盛んでしたが、今年はSISからも何か活動しようということで私達もアースウィークの推進に参加させていただきました。

農地周辺の自然環境にやさしい有機農法で育ったにんじんとさといもを農家の方から仕入れ、野菜チップスにしてフレックスタイムに売りました。農家の方も学校で有機野菜の販売をし、OISのエレメンタリーの子供達に有機野菜の種についてのお話をしに来ていただきました。フレックスタイムには、エレメンタリーからハイスクールまで各学年の生徒はもちろん、先生や学校スタッフ、保護者までも野菜チップスを買いに来てくださり、SOISコミュニティ一体として農業における環境保護を意識することができたのではないのでしょうか。



QRコードプロジェクトでは自然環境に関連するこの学校の情報をクイズにし、それを載せたポスターを学校中に設置しました。ポスターのQRコードから興味を持ってもらったクイズの答えを確認することができるという仕組みだったので、多くの人の環境に対しての好奇心を生み出すことができたと思います。私たちがイベントで廃棄するごみの量や、SOISの水道の水はどこからきているのかなど、私たちの生活が直接的にどう自然環境とどうつながっているかをみんなで知る機会となりました。

また、エレメンタリースクールの子供達が環境問題について身近な存在から学べるよう、玄関に、エコロジカルフットプリント(※人間の活動が環境に与える負荷のこと)を意識した足跡型のすごろくを設置しました。地球滅亡までのシナリオを小さな足跡から大きな足跡にすることで表現し、各足跡には、英語と日本語の両方で環境問題についての情報を書き込みました。アースウィーク終了後、エレメンタリースクールの子供達が地球が滅亡しない方法を考え、玄関に貼り出してくれ他のを見て、子供達が環境問題について興味を持ってくれたことに喜びを感じました。

学校という学びの絶好の場で、私たち一人一人が地球環境とその保護について知見を広げるのは、私たち自身にとってとても有意義なことだと思っています。この一週間で私達はSOISコミュニティの人間が、全ての人々が共に住む大きな家を守ることに、少しでも積極的になってくれたと信じています。





# EARTHWEEK in Elementary

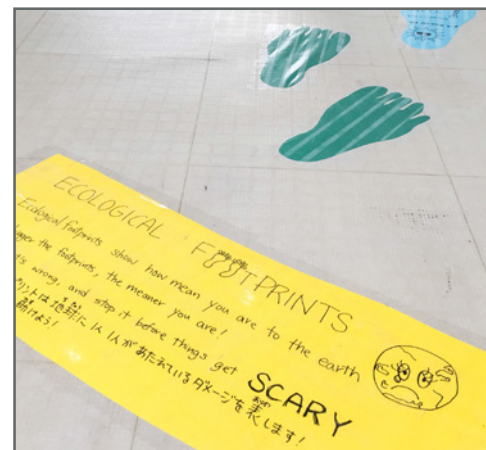
Sharing the planet is the concern of many grades at this time of year as they have been inquiring into the unit that focuses on our responsibility for caring for the earth. This coincided with Earth Week, a celebration which we have developed since last year, and which proved to be a great success.

A variety of visitors have helped KA inquire into the needs of living things including a dog and a toddler. They will also visit Minoh Insect Museum to find out how butterflies develop.

KB used the research skills they learned in their previous unit to carry out a survey of plants in school. They were shocked to find there were not plants in every classroom and some teachers were even afraid of them. During Earth Week the students were visited by an organic greengrocer, Mr Deguchi, who showed them seeds and explained how to look after plants. Since then the students have been tending different vegetable plants and

making our school a greener place.

During Earth Week itself students focused on many aspects of how to share our planet responsibly. On Tuesday we had No Power Hour, a time for switching off all our devices, lights and other energy-using equipment. Everyone was reminded that we can learn and have fun without the technology that so many of us take for granted. The following day was Wasteless Wednesday, in which the focus was on the unnecessary packaging that seems to have become such a part of our lives. Students and their parents ensured that waste was kept to an absolute minimum, while in class we also concentrated on avoiding the waste that is so common in large, working communities like schools. Focusing our attention on these issues should stay with us well beyond Earth Week itself and makes us think about the choices we make that affect our environments into the future.



Wasteless Wednesday was of particular interest to Grade 1 students who have been studying the waste we create. They issued each grade with a bag to collect rubbish from their snacks and lunches. Noticing how the contents grew over a week raised awareness of our consumption. At the end of the unit they led an effective assembly as a quiz which showed us how we can change our wasteful habits. Study the large green feet posters in the genkan to lessen your footprint on the planet! Several students are now promoting further action by leading Earth Club so that the momentum for change can be sustained.

Ms Marshall, OIS elementary principal





# SOIS STRING ENSEMBLE IN ROME



## “WHEN IN ROME...”

The SOIS String Ensemble performed recently at the prestigious 6th Roma International Music Festival in Rome, Italy from 8-11 March 2017. With a goal of learning and enjoying music through interaction and cultural exchange, the ensemble was joined by other music groups from Turkey, Ireland, Sweden, Austria, Poland and Russia. The ensemble performed in two concerts held on March 10 at the Teatro Don Bosco (with the Austrian, Swedish and Russian groups), and on March 11 with all the festival participants at the world famous “Pantheon”. The impressive culminating concert that showcased the fruitful collaboration of all the participants was witnessed by various professional musicians, tourists and other music aficionados. The SOIS String Ensemble was one of the most applauded groups during the festival concerts.

The ensemble members were practically tourists during their first day in Rome, hopping from one historical place to another and enjoying great Italian food. Strongly supported by the school community, the festival proved to be a very enriching and enjoyable experience for the students and we hope we could have this opportunity again in the future.

Members of the ensemble are Hironao Matsuyama, Nanaho Hisamatsu, Keanna Ikeda, Kikka Okuda, Suono Fujii, Selen Tanabe, Kino Hashida and Yu Takahashi on 1st Violin; Nanako Yamazaki, Runa Aota, Natsumi Kato, Mana Iwata, Sayako Tamai, Takuto Fujii, Kohki Watanabe, Hana Sugimoto, Leon Gonno and Julia Torieda on 2nd Violin; Ikumi Chigusa, Sakyo Hara, Kanon Isogai and Chisato Suga on Viola; Eishiro Ando, Mariko Akita and Soratsu Shimada on Cello; Sean Doman and Halyard Freyder on Contrabass. They were accompanied by OIS Japanese Language Teacher, Ms Rie Matsuda and SOIS String Ensemble music director, Mr Vernon Villapando.









# “Better a witty fool, than a foolish wit.”

The International Theatre Company of London (ITCL) returned once again to SOIS on May 16 as part of their annual global tour. Last year, the company gave us Shakespeare's final comedy *The Tempest* (c. 1610); this year's production was *Twelfth Night* written some ten years earlier, in the middle period of Shakespeare's roughly twenty-year play-writing career.

The dating is significant. It places *Twelfth Night* as the third in a group of three comedies in which disguise plays a crucial part, the other two being *Much Ado About Nothing* and *As You Like It*. In both *Twelfth Night* and *As You Like It*, this involves 'cross-dressing' where the main female character disguises herself as a young man, with whom other female characters rapidly fall in love, while she is in love with a male character who is also unable to penetrate her disguise. In Shakespeare's time, of course, the gender confusion was magnified since all the female characters on stage were played by young, male actors – boys playing girls dressed as boys.

The play's title refers to the early modern English festival for which it was probably first written – the twelfth night after Christmas (largely forgotten today, although still remembered in the popular carol 'The Twelve

Days of Christmas'). This mid-winter time of feasting and revelry has its origin in the Roman festival of Saturnalia, the date of which the Christian church adopted to celebrate the birth of Christ. This mingling of pagan and Christian was a cause of tension and one of the themes of *Twelfth Night* is a dramatization of the ancient conflict between the forces of Lent (a period of fasting) and Carnival.

In the play, the puritanical ideology of Lenten self-denial is represented by, and satirized in, the figure of Malvolio. His counterpart, representing the party of "cakes and ale" is Sir Toby Belch. The general tenor of the play tends towards the triumph of Carnival, although not uncritically – the treatment of Malvolio after he has been tricked into believing that the Lady Olivia loves him can be seen as unnecessarily cruel, an ominous cloud in the sunny skies of Illyria.

In the England of Shakespeare's time, Puritans were preparing to leave the old world for the new. Four years after the playwright's death, The Pilgrim Fathers set sail in the Mayflower for America to found the Plymouth colony in New England. Malvolio's parting words in the play are "I'll be revenged on the whole pack of you" and, a generation later, the Puritan ethos that he represented came to dominate the

country. The tensions that Shakespeare had been able to joke about erupted into a civil war that led to the execution of the king, his son's exile and the formation of a puritanical Republic during which the celebration of Christmas was banned. It would be eleven years before the restoration of Charles II and the return of cakes and ale.

The full title of the play is *Twelfth Night, or What You Will*. The idea behind 'what you will' is one of freedom, where boundaries of class, religious observance and even gender become blurred. Its extreme is anarchy, its opposite is oppression. Shakespeare was able to play with all these ideas, and in the hands of the actors who performed for us last month, it is as relevant, and as funny, as it was 400 years ago.

Tim Seccombe  
SIS English department

*This was ITCL's 44th tour of Japan and their 4th time to perform at SOIS. On their next tour in May of 2018 the rumour is that they'll be bringing "Julius Caesar". OIS grade 8 students look out.*

[www.stageplay.jp](http://www.stageplay.jp)







“Be not afraid of  
greatness. Some are  
born great, some  
achieve greatness, and  
others have greatness  
thrust upon them.”



# OIS G12 go to the SOIS School of Hope



Do you remember our everyday muffin and cookie sales at the cafeteria during February? Thanks to your purchases, we raised 12000 yen from bake sales alone. An additional special thank you from the entire class to the PTA for their 250,000 yen contribution to the School of Hope. The sum of money raised from 12 years' worth of international fairs, school festivals, and general fundraising accumulated to a grand total of approximately 1,000,000 yen; more than any previous grade has made. This money has all been donated to the School of Hope: to purchase new computers, pay teacher's salaries, buy sports equipment, build more solar panels, etc. On arrival, we were greeted with heavy applause. Their learning environment is incomparable to any school in Japan. Dozens of windowless classrooms surround a large plot of sandy land. In this area, you would see middle schoolers on large motorbikes, students playing sports (not in a court, but with imaginary lines), and cows walking through soccer games. The classrooms have no flooring, windows, or any cooling system. Spending time at the School of Hope allowed my class to recognize our privileges, particularly in being able to study at OIS. At the School of Hope, we divided into five groups: sports, culture, music, art, and English. Our primary objective was to interact with the Cambodian students and share our culture.

The sports group ran for hours under the hot sun in the sand: soccer, volleyball, boomerang,

juggling, and breakdance were some sports that they came prepared to share. In return, they learned how to play Cambodian sports.

The culture group taught the students traditional Japanese activities and games including アルプス一万弱 [arupusu-ichimanyaku], スイカ割 [watermelon splitting], だるまさんが転んだ [darumasanga-koronda], and 折り紙 [origami]. Like the sports group, they were taught traditional Cambodian activities.

The music group focused on interaction, singing and dancing to Japanese and American songs with the students. Whilst doing so, this group made the effort to teach popular culture through music. Their efforts were rewarded as the Cambodian students taught them popular Cambodian music.

The art group, in addition to playing artsy games like picture telephone, organized students and took leadership to create their HOPE mural, which was hung at the School of Hope.

The English group further divided into groups A and B to be able to teach two classrooms. The students used flash cards to teach simple vocabulary and reinforced this vocabulary with games like karuta, Pictionary, charades, hangman, and story-telling activities. Additionally, as requested by their teacher,

both groups taught exercises from their textbook and English songs. Songs, and their corresponding dances, that were taught included "Hello, hello, how are you", "Hokey pokey", "Heads, shoulders, knees and toes", and "Macaroni".

-----  
 "This trip made me realize how universal sports are. It's a great way to make friends and introduce yourself to someone."

(Leo Sakamoto)

"Despite the fact that we could not communicate efficiently through language, moving our body and playing sports allowed us to knock that barrier down and bond with each other. They all were very interested and enthusiastic about the new games and equipment we had brought, and they all were so pure and happy, it was peaceful to be with them. Overall, I think that playing with them was the highlight of my trip to Cambodia."

(Leola Hara)

"Learning about Cambodian culture and sharing my own made me recognize how important my culture is to me. It was inspiring to see everyone's willingness to learn."

(Anna Kim)

"Although we went with the intention to have



# SIS G8

## Kids Helping Kids

Last year, the current grade eight students completed their “Kids Helping Kids” project to raise money for the School of Hope in Cambodia, and the Mother Teresa Home in India.

We would like to thank all the people who contributed to the success of this project by putting money in our donation boxes, buying cookies at the bake sale and attending the charity concert we held in February.

The money sent to the home in India will be used to feed the children there and the money sent to Cambodia will be used to buy sports equipment and finally connect the school to the nearby electricity grid. The students learned a lot about the value of “education for all” and why it is so important that people who can help, do. Thank you again for your tremendous support and for your generosity.

The comments here are those that were said at the end of year assembly.

Mark Avery  
Grade 8 Coordinator

fun and sing with them, we ended up learning a lot about their arts culture. It made me realize how uncultured I am and made me want to embrace my culture more.” (Yuki Sutton)

“I was most surprised by their [the student’s] incredibly good manners. They won’t do anything unless a teacher permits them or requests them to do so.” (Ami Eldridge)

“I learned that it is a very difficult job to teach children, especially when you cannot speak the language. But I feel like it was still a very rewarding experience and I enjoyed being able to contribute.” (Nicole Yoo)

“Some of the Cambodian kids would make their paper landscape and write English letters vertically. They would turn their paper back to portrait at the end of writing and it would look like regular English.” (Hana Gostelow)

Kaya Freyse  
OIS Class of 2018

Yuku一ヶ月前、私たちが7年生のカンボジアとインドへの募金プロジェクト、Kids Helping Kidsを紹介させていただきました。

Keisuke:その後募金箱を色々なところに置いて、そして玄関やカフェテリアで募金をお願いしました。

Kento:皆さんが協力してくださったので、カンボジアとインドの子ども達の生活を、ささやかですが、変えることができると思います。

Tasihi: 2月6日のアセンブリーで申したように、この募金を、カンボジアのthe School of Hope とインドのMother Teresa’s Home に送ります。

Junji: The School of Hope で、文房具やスポーツ用品を買ったり、電気設備を整えたりしてもらえていると思っています。

Mao: The School of Hopeの生徒達が、このお金で、サッカーをしたり、教科書を買ったり、教室に電気をつけたりすることができると思うと、とても嬉しいです。

Rihito: 今日は、皆さんの協力の結果を発表します。

Nana:この募金箱に入れてくださった募金額の合計は43000円です。

Mikan: ちょっと待って!!パークセールもやったよ。

Sari: カフェテリアでクッキーを買ってくださりましてありがとうございます。パークセールでこの募金--9781円を集めました。

Mio: こっちもあるよ!!Charity Concertもやったよ。

Shiori: Charity Concertに来てくださり、募金をしてくださって有り難うございました。

Mio: Charity Concertでこの募金-- 27381円を集めました。

Nozomu:合計でこれだけの募金(80162円)を集めました。The School of HopeとMother Teresa Homeに送ります。本当に…Everyone有り難うございました!!





# Muhlenberg College x SOIS Cultural Exchange

25 May 2017

Muhlenberg College is a private liberal arts college located in Allentown, Pennsylvania, United States. Some of their courses include short-term international study components.

Kammie Takahashi (Assistant Professor of Religion Studies) and Kimberly Heiman (Lecturer in Sustainability and Conservation Biology) brought 14 of their undergraduate students to Japan, spending one day with 13 SOIS students as part of their Japan sojourn, traveling to the UNESCO World Pilgrimage site of the Kumano Kodo and visiting at various shrines and temples. They saw the trip to SOIS as exploring education in Japan and getting an idea of how urban setting and institutions deal with issues such as sustainability, green space, and sacred spaces. The intention was for the students from Muhlenberg College and SOIS to interact with each other both in formal and informal settings. Prior to their arrival, Muhlenberg students had been in contact with SOIS students using the internet.

The day began with a brief reception and refreshments where the decline in SOIS electricity consumption was enthusiastically noticed. Then Professor Heiman presented a lesson on climate change and human interaction with the environment to the OIS

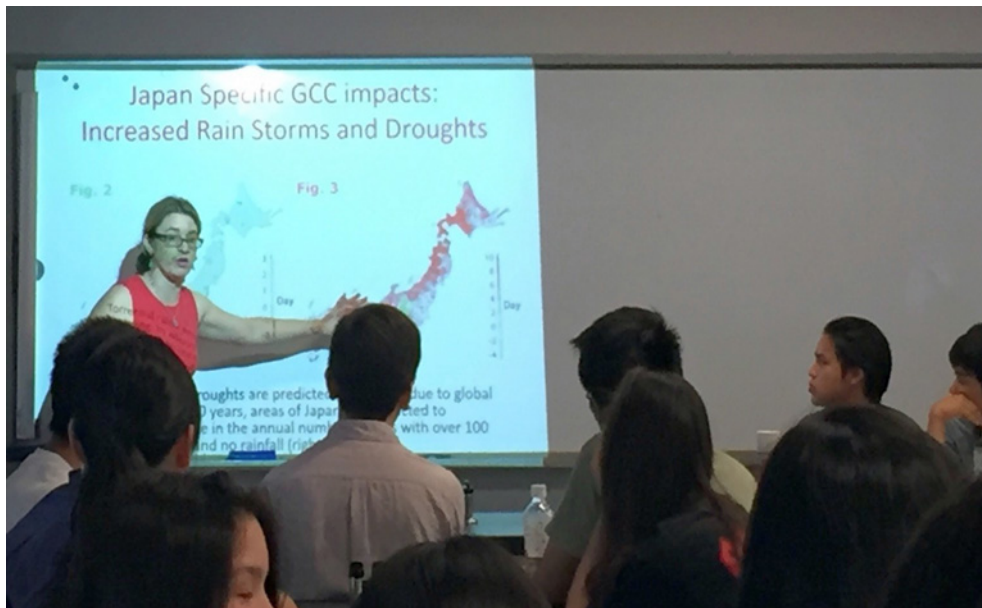


grade 11 class together with a group of SIS volunteers. For the OIS students this was a useful revision of recently studied matters about the human activities that affect climate change. Professor Takahashi then gave a brief talk about the involvement of religion and ethics on how humans relate to their environment.

The OIS students then returned to their normal timetable whilst The SIS students

accompanied the visitors on a tour of the local area. Prior to, and during, the tour, Mr. Stone gave a brief orientation about the Japanese culture and local area from his international perspective. Onohara-nishi does have its own bamboo forest, along the edge of Senrikita park, as well as the Kasuga shrine, the Satorusho temple and the surrounding heritage area. This walk gave many opportunities for conversations and interaction, and the SIS students did an excellent job of explaining many aspects of Japanese customs and traditions.

OIS and SIS students then accompanied the visitors to lunch and an open exchange of views between the students afterwards. Emi Tsudaka also gave a thorough explanation of the Super Global High School Initiative and what it entails for the SIS students.





# ミュンヘン大学×SOIS リベラルアーツ交流ゼミ

2017年5月25日(木)

ミュンヘン大学はアメリカ・ペンシルベニア州アレタウンに位置するリベラルアーツ大学です。科目によっては短期の国際的な活動を含むものがあります。

教授カミー・タカハシ先生(宗教学)とキンバリー・ハイマン先生(持続可能性と保全生物学)が14名の生徒を引率され、13名のSOIS生徒と1日を過ごしました。この日本滞在では、世界遺産の熊野古道伊勢路をはじめとするさまざまな神社や寺院を訪問される予定です。ミュンヘン大学の皆さんにとって、SOIS訪問は日本の教育に触れたり、都市部がいかにして持続可能性の問題や、緑地、神聖な場所に取り組んでいるのかについてアイデアを得る機会となりました。当初のねらいとしては、ミュンヘン大学の生徒とSOISの生徒が全体で・個人同士で互いに交流することでした。また、この訪問の前1か月程度はミュンヘン大学の生徒・教員とSOISの生徒・教員はインターネットで交流を続けていました。

当日は、教員ラウンジにての歓迎から始まり、そこに掲示してあるグラフから、SOIS電力消費量の着実な削減を説明しました。その後ハイマン先生から「気候変動と人間の自然への影響」というテーマでOIS11年生のクラス全員とSOISの6名に向けて授業をしていただきました。OISの生徒にとっては、



先生によるオリエンテーションが行われ、日本文化や小野原西エリアについて学んでから出発しました。学校が位置するエリアには、北公園に沿って竹林があり、春日神社、理照寺、西国街道といった歴史的スポットがあります。このツアーでは生徒・学生間の交流や会話が始まり、SOIS生徒は日本文化や伝統について説明をすることでおもてなしをしていました。

帰校後は、SOISの生徒でミュンヘン大学の皆さんをカフェテリアにご案内し、自由な交流時間を持ちました。SOISの津高先生による、SOISも指定されているスーパーグローバルハイスクール(SGH)の取り組みや日本政府の教育政策について説明があり、ミュンヘン大学の学生には日本の教育の転換点を知る機会にもなりました。

この企画を実現するためにご協力いただいた皆さんに感謝申し上げます！

最近学んだ気候変動に影響を与えている人間活動について、良い復習になりました。タカハシ先生からは、「環境問題に関する宗教的側面」というテーマで授業をしていただき、宗教や倫理がいかに人間と環境を関連付けているのかについて考える時間となりました。

その後、OIS生徒は一旦通常授業に戻り、SOIS生徒がミュンヘン大学の皆さんを近隣のツアーに案内しました。ツアーの前にOISのストーン





# World Scholar's Cup 2017

## WSC Kansai Round

**W**orld Scholars Cup is an enjoyable academic competition. There are three types of rounds; regional round, global round and tournament of champions. You get to advance into the next round in this order if you get qualified in each of the rounds, and you get to make friends from all over the world.

In WSC, there are four team events. We have the Team Debate, Scholar's Bowl, Collaborative Writing, and the Scholar's Challenge. A theme and a curriculum which consists of 6 subjects are announced every year, and these four events are based on the subjects. Not only do the scholars have to learn the materials for preparation, but they also learn to connect each of the subjects and create links among them. Additionally, the topics are not something you will find in a textbook. You get to master topics like superheroes, history of cheating, predicting the future...something you wouldn't learn in school. From these events, you will gain confidence by accomplishing something you have never done before.

This competition also teaches you to not push yourself too hard. We have the WSC's mascot, alpacas as a figure to teach that to us, and you get to adopt one in each of the



rounds. The fluffy colorful huggable alpacas are really cute and we all love the alpacas.

The Kansai Round started in 2014 at our school, and this year it was held at April 29th and 30th. This year, scholars from all over Kansai participated and we had more than 100 scholars for the first time in Kansai. It was another successful pwaamazing round. (Pwaa is what a happy alpaca says)

This is my third year participating in WSC,

and I can't wait for the upcoming global round. Through this valuable experience, I have learned that you can enjoy studying. You get to know that learning is fun. You will start wanting to learn more. This is no ordinary academic competition and you will gain knowledge from a wide variety of things. If you are interested, I recommend you to participate next year.

SIS G11 Chisato Suga

## WSC 関西大会

World Scholars Cupは、アカデミックで尚且つ楽しめる大変ユニークな大会です。大会には、地域大会、国際大会、そしてチャンピオン大会の3種類があり、チームの成績により、次の大会に進めるかどうかが決まります。また、これらの大会を通して世界中の学生と友達になることができます。

大会では、Team Debate, Scholar's Bowl, Collaborative Writing, Scholar's Challengeの4種類のチームイベントがあり、そこでディベートをしたり、作文を書いたり、選択問題などをします。これらのイベントは毎年発表される一つの大きなテーマとそれに基づく6つの科目が元になっています。参加者には大会に向けてこれらの科目を勉強するだけでなく、各科目を他の科目や時事問題などに繋げて考える能力が必要とされます。また、これらの科目はとてもユニークで教科書から学ぶようなものではありません。例えばスーパーヒーローや、不正行為の歴史、未来の予測等が一つの科目となり、普段学校では学ばないことを学ぶことができます。これらは楽しいと同時に多くの時間をかけてリサーチせねばならず、難易度も決して低くはありません。それだけにWSCに挑戦した参加者は達成感と自信を得ることができます。

もう一つ、私がとても気に入ってる所は、この大会は自分を追い詰めすぎないことを教えてくれる所です。それはこの大会のマスコットにもなっているアルパカの存在です。以前主催者の一人の方から聞いたのですが、みんな一生懸命になりすぎないように、癒しの存在としてアルパカがいるそうです。各大会でみんな1匹のぬいぐるみのアルパカの親になることができます。アルパカはふわふわしていてとてもカラフルで可愛くて、みんな大好きです。

関西大会は2014年に本校で初めて開催され、4年目となる今年の大会は、4月29日、30日に開催されました。今年の大会は、参加者が初めて100人を超え、大変充実した大会となりました。

今年は私にとって3年目のWSCの参加となります。今年もハノイで開催されるグローバルラウンドに行くのがとても楽しみです。WSCを通して、勉強は楽しいものだということを知ることができました。学ぶことは面白いし、学び始めると、さらにいろんなことを知りたくなります。この大会はとてもユニークな大会であり、勉強面以外にもこれからの人生の糧となる豊かな経験をすることができます。興味があったら、是非参加してみてください。

SIS 11年生 菅千都



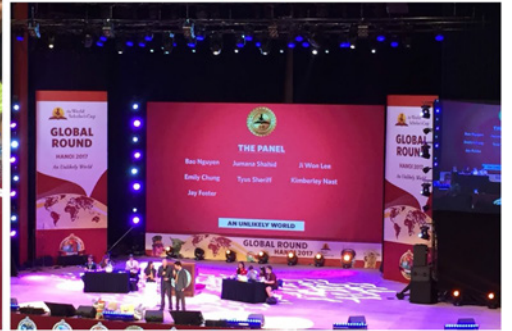


## WSC Global Round in Hanoi

30 SOIS students traveled to Hanoi, Vietnam this summer to participate in the World Scholar's Cup Global Round. The goals of World Scholar's Cup to motivate students of all backgrounds to discover new strengths and practice new skills and to inspire a global community of future scholars and leaders. The event is a celebration of learning centered around 4 academic events, including debate, knowledge bowl, collaborative writing, and a challenge test. Included in between these are social events to get students to make connections with others. More than 3000 students from over 50 countries were in Hanoi. All of the students had to qualify for the round through local events.

All of the SOIS students did well, making many friends and learning much about themselves and the topics of this year's event. Several students placed very high in the standings, considering the over 1,000 teams in the two divisions. Grade 9 Emily Yoo finished 44<sup>th</sup> overall in the junior division. The team of Tyus Sheriff (4<sup>th</sup> overall), Skye Inada (30<sup>th</sup> place) and Minami Matsushima (43<sup>rd</sup> place) won third place in the senior division. SIS English teacher Steve Sheriff won the Coach of the Year prize for his efforts in building the program at our school. Congratulations to all the students and teacher involved in the program!

SOIS students will be traveling to Yale University in November to participate in the WSC Tournament of Champions.





# SABERS SPORTS and ACTIVITIES

## SABERS ONLINE

Sabers website: [sabers.senri.ed.jp](http://sabers.senri.ed.jp)

Sabers Athletics Facebook page

[www.facebook.com/groups/SabersAthletics/](http://www.facebook.com/groups/SabersAthletics/)



## AISA SOCCER AND SWIMMING RESULTS

13–16 April 2017

- SOCCER girls @SISソウル 2nd
- All-tournament team: Ami Eldridge, Airu Mukaiyama, Haruna Tomiguchi, Elena Benfield
- Coaches: Mr. Frater, Kono-sensei
- Managers: Mai Beppu, Hinako Akeyama

SOCCER boys @BIFS釜山 2nd

- All-tournament team: Kento Moriguchi, Hiroto Inui, Tommy Ban, Shutaro Hisamatsu
- Coaches: Mr. Haske, Mr. Entwistle
- Managers: Rina Fujiwara, Yuma Funamoto, Selen Tanabe

SWIMMING girls @SOIS大阪 3rd

- Sabers top female swimmer: Natsumi Takeda, 5th place
- Coach: Kano-sensei
- SWIMMING boys @SOIS大阪 3rd
- Sabers top male swimmer: Yoshi Kamegai, 9th place
- Coach: Mr. Bertman

## AISA math mania 2018

SOIS plays host to the AISA math mania contest in February 2018, welcoming teams from South Korea and Yokohama. The annual SOIS math contest will be held at the end of November 2017, with the top 6 mathematicians earning the right to compete for the Sabers (optional participation). All math students are encouraged to enter the contest, whether you want to compete at AISA or not. All questions are in English and at the grade 9/10 level. See Mr. Bertman for more details.

## SABERS SIGN-UP

All students, middle school and high school, who want to join a Sabers team must sign up online. Forms for team sign-up, sportsmanship agreement, and parent permission must be submitted via the Sabers website. Go to the "Forms" tab on the website: <http://sabers.senri.ed.jp/sabers-sign-up.html>.

No sign-up = no practice. No practice = no play. No play = no fun. Let's have fun! Go Sabers!

セイバーズ・サインアップ

セイバーズ・サインアップ・フォームやスポーツマンシップ同意書、保護者承諾書などのセイバーズ スポーツに参加するために必要な全ての書類を、オンラインで提出してください。未提出の場合は、練習や試合に参加することができません。セイバーズの一員として楽しい時間を過ごすために、全ての書類の提出をお願いします。詳しい情報は、セイバーズのホームページの「Forms」内 (<http://sabers.senri.ed.jp/sabers-sign-up.html>) をご覧ください。よろしくお願い致します。

## AISA RESULTS 2016-17

Tennis

- girls: AISA @横浜 3rd, sportsmanship
- boys: AISA @横浜 4th

Volleyball

- girls: AISA @釜山 3rd
- boys: AISA @ソウル 1st

Basketball

- girls: AISA @横浜 2nd
- boys: AISA @大阪 3rd

Soccer

- girls: AISA @ソウル 2nd, sportsmanship
- boys: AISA @釜山 2nd

Swimming

- girls: AISA @大阪 3rd
- boys: AISA @大阪 3rd

## SABERS WEBSITE

セイバーズスポーツに参加したい生徒は、必要な手続きをセイバーズのホームページ ([sabers.senri.ed.jp](http://sabers.senri.ed.jp)) 上にて完了してください。

毎週土曜日に本校や近隣のインターナショナルスクールにおいて、スポーツの試合が行われています。セイバーズのホームページ ([sabers.senri.ed.jp](http://sabers.senri.ed.jp)) では、学校が発行するカレンダーに記載されているスポーツの各大会 (WJAAやAISA、セイバーズ招待試合) の日程に加えて、週末に行われる試合のスケジュール (開催場所や開始時間) やその結果を確認いただけます。また試合でハットラツとプレーしている選手の写真や、隔週水曜日に放送されるセイバーズTVの映像などもご覧いただけます。それ以外にも、セイバーズ・アクティビティー・ハンドブックやホームステイに関するご案内、セイバーズスポーツに参加するために必要な保護者承諾書などの提出書類一式などが、ホームページからご覧いただけ、提出することができます。この機会に一度、ホームページにアクセスしてください。

Be sure to bookmark the Sabers athletics website at [sabers.senri.ed.jp](http://sabers.senri.ed.jp). For all Sabers information – weekend schedules, match reports, team photos, Sabers TV videos, permission forms, homestay information – please visit the Sabers website. You can read the Sabers activities handbook, submit a digital copy of your passport, and view a Sabers Google calendar.



# SABERS ATHLETIC AWARDS CELEBRATION 2017

Athletic awards celebration: [sabers.senri.ed.jp/awards](http://sabers.senri.ed.jp/awards)

On Friday, June 2, 2017, we held our annual Sabers high school athletic awards celebration. Players and coaches reminisced about the year with photos and videos and with speeches from players of all girls and boys varsity teams. We honored our high school student-athletes with two kinds of awards: 1) three team awards: most improved player (MIP), most valuable player (MVP), and Sabers Spirit Award (SSA), chosen by each team's coaches; and 2) two school awards: Sabers Outstanding Athlete of the Year and Dr. Fukuda Scholar Athlete, chosen by coaches and school administrators.

## Outstanding Athletes of the Year

Leona Benfield  
Aki Shigeyama

This award is presented to Sabers student-athletes, female and male, who have shown high levels of athletic skill, team leadership, and personal determination as a member of at least two varsity teams. Recipients of this award are positive role models and good representatives of SOIS. Leona Benfield (SIS graduate) and Aki Shigeyama (OIS 12) are very deserving recipients: both were captains, MVPs, and/or all-AISA players in their respective sports.

## Dr. Fukuda Scholar Athletes

Haruna Tomiguchi  
Leo Roberts

This award is presented to Sabers student-athletes who have achieved high academic levels and have played active roles in school and community service while a member of at least two varsity teams. The winners of this top award show that one can maintain high academic standards and contribute to the school community while participating in sports. The coaches and administrators were very proud to present the Dr. Fukuda Scholar Athlete awards to Haruna Tomiguchi (SIS 12) and Leo Roberts (OIS 12), both first-class Sabers athletes with very high grades.

## Sabers Spirit

Haruna, Leo, Aki, Kento, and Leona all epitomize what we expect our Sabers student-athletes to be. We congratulate and thank all Sabers players, coaches, administrators, and parents.

[sabers.senri.ed.jp/spirit-sportsmanship.html](http://sabers.senri.ed.jp/spirit-sportsmanship.html)

## Sabers TV -

<http://sabers.senri.ed.jp/sabers-tv.html>

"Welcome to another episode of Sabers TV!"

Every other Wednesday morning, Sabers TV is broadcast to classrooms via the SOIS in-school television network. (Check out the Sabers TV website for digital replays of each show.) Student anchors, interviewers, camera operators, and control board technicians all work together to put on this polished biweekly show containing updates on Sabers results and interviews with coaches and players. With the technical expertise of Mr. Frater and minimal guidance from Mr. Heimer, the students write, organize, rehearse, promote, produce and broadcast the show on their own, providing an informative and entertaining service to the Sabers community.



## Sabers leagues: WJAA and AISA

The Sabers of Senri and Osaka International Schools of Kwansei Gakuin (SOIS) belong to two competitive sports leagues, one domestic and one international, each with season-ending championship tournaments. Participation in these leagues gives SOIS students ample opportunities to interact with students from many countries.

SOIS is a founding member of the domestic Western Japan Athletic Association (WJAA). The Sabers compete against WJAA members and host important WJAA tournaments. There are weekly WJAA competitions and season-ending tournaments at all levels: high school varsity and junior varsity, and middle school A and B divisions. The WJAA consists of several international schools and US military base schools in Japan, predominantly in the Osaka-Kobe-Kyoto area, but also stretching from Sasebo to Fukuoka to Nagoya to Hokkaido.

SOIS is also a founding member of the Association of International Schools in Asia (AISA) and competes in volleyball, cross country, basketball, soccer, swimming, math mania, and leadership. AISA forms the main avenue for overseas competition for SOIS students and provides opportunities for valuable international experiences for our school community. AISA consists of five schools in Japan and South Korea.

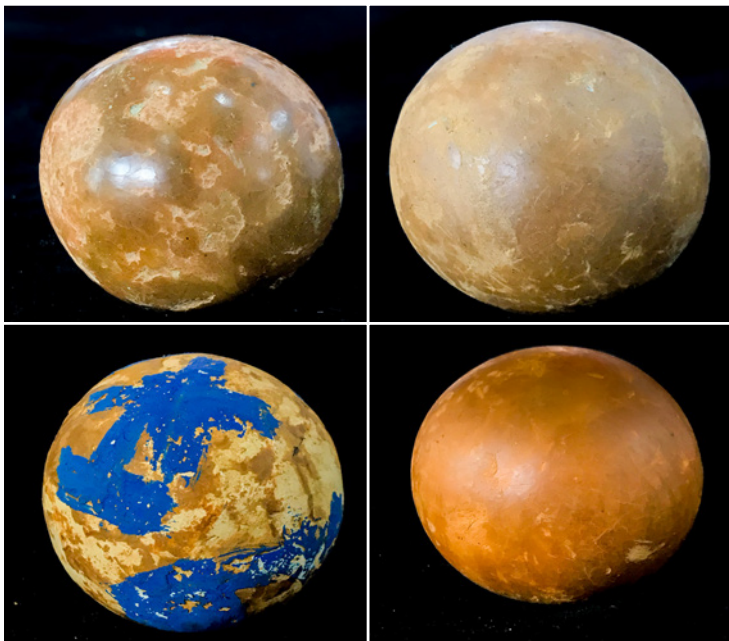




My dad started collecting colorful striped socks in 2009 the year I was born. He said he wanted to stimulate my baby vision and thought I would learn to recognize him by his socks. When I was learning to crawl I would reach for his socks. So every week he would buy a new pair to teach me different colors and his purple socks became a favorite object of mine when I was a toddler. I am 7 years old now but I still remember when my dad entered the room, his colorful striped socks always caught my eyes. Even to this day when I see my dad's bright socks I knew he was here to play!









# 2017年度入学式



新入生、編入生の皆さん、入学おめでとうございます。保護者の皆さま、心よりお祝い申し上げます。

体育館いっぱいの大歓声で大歓迎を受けて皆さんは本日SISの一員となりました。今の気分はいかがでしょう。SISの入学式はこんな雰囲気だよ、と聞いて知っていたつもりだけれど実際に今体験してみてもびっくりしている、と感じている人もいるのではないのでしょうか。

百聞は一見に如かず。Seeing is believing、何事もほんものを体験してこそです。テクノロジーが発展している今日、インターネットを使えば世界中のいろんな場所に行った気持ちになれるし、体験できた気がします。それは便利で素晴らしいことではありますが、でも本物と「ほんものみたい」とは違います。今日はこのほんもの＝Authenticということについて一緒に考えましょう。

ほんものを体験すること＝Authentic Opportunities これはSISの学びの特徴のひとつです。たとえば、今日、ストリングスの演奏に迎えられましたように、音楽の時間には本物の楽器を使って本物の演奏を学びます。英語などの語学の授業では本物の使える言語として学びます。理科では本物の実験器具を使っただけの実験が待っています。7年生から、大人と同じ本物のリサーチの仕方

や発表の仕方を学びます。高校の課題研究では、いろいろな分野で活躍している本物の人物に会いに行きインタビューをするという体験から本物の研究を行います。本格的なミュージカルを体験できる機会もあります。そして、すべての教科の授業で本物の学びを用意しています。ほんものの学びとはなんでしょう。SISでは自分の頭で考えて理解し、自分の意見を求められますし、人の意見もしっかり聞きます。議論もします。発表の機会もたくさんあります。もっと知りたい、もっと世界を広げたいと自分から学びにむかってもらいます。そんな本物の学びの機会が待っています。本物の学びを知っている人とは、学び方を知っている人、学ぶ楽しさを知っている人です。だから大人になっても学び続ける人であってほしい。そんな本物の学びに飛び込んでください。

ここで紹介したい英単語があります。Serendipityです。私自身は15年位前にこのタイトルの映画があり、その時に初めてこの単語に出会いました。英語教員ですが、その時私はこの単語を知らなかった。辞書を引いてみると「素敵な偶然の出会い」とあり、たしかに映画は素敵な偶然の出会いの恋愛映画でした。正直、映画はあまり記憶に残っていないのですが、この言葉がその後ずっと気になりました。不思議なもので、気になる

と、いろんなところで出会うのです。心理学の本や、サイエンスの記事などです。そして、このセレンディピティという言葉の意味は最初に辞書で見たものよりも実はもっと深いのだということを知りました。「棚からぼた餅」のように向こうからやってくるただの偶然の現象ではなく、出会うことは能力なのだとということを知りました。サイエンスの世界では「ニュートンが、りんごが木から落ちるのを目にして万有引力を発見した、そのひらめきの能力が、まさにセレンディピティだ」というように使われており、なるほどと思いますが、人や物との出会いも同じで、素敵な出会いができるのも、運命ではなくて能力だということです。これを知ってから、能力であるならば努力で伸ばすことができるはずだと考えてきました。15年間考えた末私は、このセレンディピティを高めるには何よりも本物にたくさん触れることが大切だと思っています。そして、目の前にあるチャンスに対して自分から行動を起こす気持ち、また、そこで遭遇する予想外のことや自分にとって異質とすることも受け入れるという経験を積んで身に着く能力だと思っています。SISには目に見えるチャンスも見えないチャンスもたくさん用意されています。しっかりと本物をつかみ取って、セレンディピティを高めてもらいたいと思っています。

「ほんもの」についてもうひとつ話をします。皆





さんを取り囲む旗を見てください。たくさんの旗の中で、ふたつある旗があります。国連の旗です。どうしてSISの入学式には国連の旗が、しかも二枚掲げられているのでしょうか。今日はこの入学式の前に、新入生と編入生のみなさんには、生徒宣誓の書類に署名をしてもらいました。このあと代表の人たちにこの場で複数の言語で宣誓を聞かせてもらえることを楽しみにしているのですが、このSISの生徒宣誓には、「世界人権宣言の精神を追求し」とあります。世界人権宣言は第二次世界大戦のすぐ後の1948年に国連で作られたものです。また、戦争を反省し、世界の平和を願って作られました。SISは今日第27回目の入学式を挙行していますが、その第1回目から国連の旗を中心に掲げ、世界人権宣言を取り入れた宣誓を行ってきた学校です。世界人権宣言でも特に大切にしている第二条は、生徒ハンドブックにも掲載されています。

Everyone is entitled to all the rights and freedoms set forth in the Declaration, without distinction of any kind, such as race, colour, sex, language, religion, political or other opinion, national or social origin, property, birth or other status.

すべてのひとに権利と自由があり、その人がなにか、肌がなにか、男か女か、どんな言葉を使つか、何を信じるか、何を言ったり言いたがっているか、世界のどこから来たか、金持ちか貧しいか、どんな生まれか、身分は何か、などのことで差別されない。

これは例えて言うならば、和菓子も好き、パンも好き、カステラもおいしい、トルティーヤもナンも、、そこに優劣がないのはもちろんのこと、このような豊かで多様な文化に触れることを喜びだと感じることのできる心で、地球の一員、世界市民として成長しようということです。SISは、自分の国や住んでいる国を大切にすると同時に、世界中がよりよく、より平和になることを大切に考える学校です。関西学院千里国際は、「本物の国際学校」です。

さあ明日から一緒に本物の国際学校で、本物の学びに取り組みましょう。セレンディピティを高めて素敵な人や物やチャンスに出会いましょう。

皆さんあらためてSISへようこそ。入学おめでとう。

2017年4月4日 SIS校長 井藤眞由美





# SGH - 村田ゼミ×千里国際合同ゼミ2017



4/8(土)に開催されたこのゼミに向けて、関西学院総合政策学部の村田俊一先生から、「援助協調」をテーマとしたケーススタディが課題として出されました。ゼミ当日まで、私たちは予定より多いミーティングを持ち、そのテーマについて考えを深め、そのケーススタディに出てくる多種多様な問題の解決に挑みました。

## 千里国際の発表内容概要

まず私たちは、ケーススタディに出てくる複雑な登場人物やその登場人物の相関関係について明確化させるためにわかりやすく整理した結果を詳しく説明しました。その次にSIS生で何度も行ったミーティングで挙がった問題の所在について話し、私たちが考えた教育援助協調の問題に対する解決策として「援助国と被援助国がその国のNeedsと現状をお互い理解する為の会合を開くこと」と提示しました。その際に我々が行った先行研究の分析も一緒に発表しました。さらに、その問題を解決する重要性を明示するために、実際に存在する国を一例として、ケーススタディと比較しました。最後には、今まで行ってきた、私たちの白熱したディスカッション内容なども紹介しました。村田先生からは厳しくもとても興味深い意見やアドバイスを沢山頂くことができました。

## 村田ゼミ生の発表内容の概要

村田ゼミ生は、「妥当性」・「有効性」・「インパクト」・「効率性」・「自発展性」という5つの要素を含む「DAC5の原則」原則を発表内容の中心に置いていました。私たちにはない観点で、ゼミ生の今までの経験や豊富な知識が伝わってくる内容だったと思います。それに重点を置きながら、援助国と被援助国の間にあるパワーバランスの問題を解決する目的を持つ「円卓会議」と、被援助国のオーナ

ーシップの確立を目的とする「初等教育の内容改善」が具体的な解決策として挙げられました。

## 村田先生からの印象的な言葉

村田先生が私たちに告げた様々な言葉の中でも、特に心に残っている言葉がいくつかあります。被援助国が援助されることに依存している状態を表す意味の「援助慣れ」また、学校のあり方について、「学校は会社人を創り出すのではなく、社会人を作り出すところである。」という言葉などです。

## 今回参加したみんなの感想

小見山 珠実:この村田ゼミを通して、ひとつの問題でも無数の切り口から解決策を見つけ出すことができるということを学びました。

そして村田先生や大学生の方々の「切り口」の多さには圧倒されてしまいました。私もこれからたくさんの「切り口」を身につけていきたいです。

伊藤美月:メンバーと何度も行ったミーティングでは、お互い真剣にテーマについてとことん語り合い、最後にはメンバー全員が全力を出し切ったプレゼンを大学生の前ですることができました。今回のゼミでは視野を広げることの大切さ、提案に実現性を持たせる難しさを改めて感じさせられました。

的場健吾:思ったよりケーススタディが複雑だったため、解決案を思いつくのに苦労しました。創造性のある発想をディスカッションを通して聞くことができ、自分の視野も広がりました。これから問題解決能力にさらに磨き上げていきたいです。

西井彩夏:今回ケーススタディではみんなで問題点を洗い出し、解決策を模索して、その方法を知りました。これからのSGHの研究で参考にしていきたいです。

児玉実央:途上国への教育援助は自分にとつ

て新鮮なトピックで、国際問題の本質についてメンバーとディスカッションをしたのはとても記憶に残っています。自身の教養のためにも良い学びの機会になったと思っています。

和氣礼佳.:何度ミーティングを重ねても解決しない問題に対して、常に一歩ひいて全体を見ながらぶつかり続ける姿勢の大切さを学びました。村田先生に誉めて頂けてすごく嬉しかったです。

足立晴香:本番当日も含め、本当に楽しく刺激の多いミーティングで、村田ゼミを通して久しぶりにあのような発表をしたし、ケーススタディではありますが、その問題の解決案をみんなで深く考えることが出来ました。ケーススタディを通じて話合ったり、みんなでディスカッションしたりしたことは、様々な問題の所在や解決案を考え、絞り出す力が向上すると共に、現実にある問題にも当てはまりうるコアコンフリクトが発見できるので、良い経験です。今後も問題解決能力や、協力してより良い解決案を考え出すスキルを向上させるためにも、興味のある問題をとことんリサーチし、それに対する自分なりの意見を持ち続けられるように、励んでいきたいと思っています。

## まとめ

今回、村田先生を含めた村田ゼミの大学生の方々から多くを学ぶことができました。学ぶといっても学校で決まったことを、答えがあることを教えてもらって学ぶと言う感覚ではなく、より深く知ってより深く悩むといった感覚です。裕福な日本の小さな教室で、話し合うにはあまりにも大きすぎる難しい話でどれだけ考えても答えにはたどり着ける自信がありません。しかし、より強く思えたのはこの世の中にはたくさんの不平等と見過ごしがあること。そして結局、人と人の問題で、人間にしか解決できないということ。ゼミの方々にはそこを気付かせてもらい、より勉強に励む活力を与えてもらったような気がします。

私(富山もも)は去年の第一回にも参加しましたが、今回はSISの会議での話が、前回より深く話できていて、どんどん刺激的なゼミになっていると思います。村田先生が行っている年齢のボーダーのない学習は、大学生と高校生そして先生方が一緒に学習する素敵な機会になりました。これからも村田ゼミを継続してほしいと思います。

森本裕也・足立晴香・富山もも

SGH website

<http://sisgh-japan.blogspot.jp/>





## 気候変動自主研究チームが研究助成プログラムに採択されました

褐虫藻とイソギンチャクの共生についての自主研究が昨年11月に始まって以来、気候変動自主研究チームは着々と実験やディスカッションを重ねてきました。多くの失敗があり、なかなか研究が進みませんでした。良いニュースが飛び込んできました。

この研究チームが「第1回 日本財団マリンチャレンジプログラム」として採択されましたので報告いたします。

全国から選ばれた採択60チームのひとつとして研究資金助成や研究アドバイザーによるサポートを受けることができます。研究指導助言をしてくださる 高橋俊一 博士 (国立基礎生物学研究所 准教授) はもとより、さらに強力な後ろだてが得られることとなりました。ありがたく思います。



## 関西学院関連高校生オールスターキャンプ 実行委員会

関西学院関連高校生オールスターキャンプの実行委員会がスタートしました。

関西学院千里国際高等部と関西学院高等部、啓明学院高等部、帝塚山学院高等部の4校で実行委員会を組織し、8月16日から3日間の関西学院千刈キャンプでの合宿に向けて準備を進めていきます。

内容は関西学院大学の先生を各学部からお招きし、小グループで先生を囲みゼミスタイルで話し

合います。昨年のテーマは国連のSDGsの各テーマを日本の国内問題として考えていくというものでした。各先生の専門を生かしたディープな議論が魅力的です。自分が興味のある分野の先生と知り合いになれて、休憩時には進路のことなども相談できたり、他にはないプログラムです。

第1回の実行委員会では、今年のテーマを話し合いました。白熱した議論の末にまとめたのは「20年後の日本は幸せなのか? 20年後の日本の姿を予測した上で、『幸せな社会』を実現するために今何をしなければならないのかを考えよう」というものです。

## ビジネスプラン・グランプリ対策講座 第2弾(応用編) 開催

3月に開催したビジネスプランコンテスト対策講座に続き、4月27日に、第2回のワークショップを開催しました。

前回と同じく日本政策金融公庫の中谷裕志さんをお招きし、高2と高3の生徒14人が参加しました。

今回は企画から募集、今日の司会までを高等部2年の宮脇昌志君が担当してくれました。具体的なビジネスプランの作成方法のいくつかを学びましたが、顧客のターゲット絞り込む方法などを、具体的な事例をもとに考えていきました。

参加した生徒の強い希望で第3回の開催を決定! 宮脇君を中心とした有志で準備を進めていくことになりました。

中谷さん、毎回ほんとうにありがとうございます

## ビジネスプラン・グランプリ対策講座 第3弾(応用編) 開催

日本政策金融公庫の中谷様に今回で3度目となるワークショップを、2017年5月30日(火)に開催していただきました。ご協力いただき、誠にありがとうございます。前回参加者からの強い要望があり、今回も生徒のリーダーシップで実現に至り、12年、11年の8名が参加しました。

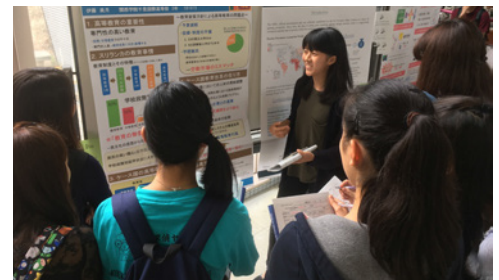
最後は、司会生徒の進行で、恒例の一言感想で締めました。

具体的な質問がでてきて、中谷様から具体的な回答を頂き、ビジネスプランコンテスト応募へ、さらに一歩近づけたようです。

生徒から中谷さんに感謝の気持ちを伝えているのが印象的でした。

みなさん、ビジネスでこのグローバル社会の課題に挑みましょう。応援しています!

## 6/29 ポスター発表会





## 特別企画 - 月亭方正講演、インタビュー

19 May 2017

## Performance and interview with rakugo artist Tsukitei Hosei



IC: 今回の講演は、学校からの依頼ではなく、ご自身の希望で来てくださいました。その動機を教えてくださいませんか。

TH: 去年、中学生の長女の学校で落語会をしました。反響がすごく良くとても嬉しかったです。13歳から15歳までの多感な時期に落語という日本の伝統芸能に触れてもらいました。生徒たちからの意見の中で「落語は難しいと思っていたが楽しかったです」というような意見がたくさんありどの年代でも楽しめるのだと再確認しました。今回次女の学校で落語を披露することで落語自体を身近に感じてもらいたいと思い提案させていただきました。

IC: SISの中学生の前で落語をされて、生徒たちの反応についてどう感じましたか。

TH: とても良かったです。千里国際の先生から「このようにみんなが楽しめる授業をしたいです」と言われた時は何かお役に立てたかなと思いました。

IC: よく聞かれるとは思いますが、落語家にシフトされたきっかけはなんですか。

TH: とても長いお話なので、字面にはしにくいですが、...このような講演も生徒達の前で出来たらなと思います。

IC: 今回の演目の「手水廻し」は上方古典落語の中ではかなり有名な話だそうですね。新作、古典についてはどう考えておられますか。

TH: 新作落語も作っていますが、やはり落語は古典落語の完成度の素晴らしさをまずは伝えるべきだと考えています。

IC: ロングホームルームの最後の方で、高等部にも見せたいと言ってくださいましたが、また来ていた

だくことは可能ですか。

TH: 勿論です。スケジュールの確保は難しくなってきましたが。

IC: SISについて、気に入っておられる点がありましたらぜひ教えてください。

TH: 子供達が伸び伸びと学び生活しているのは本当に素晴らしいと思います。自分自身の学生生活を思い出しますが、こんな学校に通っていたらもっと楽しかっただろうなと羨ましくも思います。

IC: OISにも落語を聞きたい生徒がいると思います。英語で落語をされたことがありますか。

TH: 英語で落語はありません。ただどうしても英語で落語をやるとアメリカンジョークになってしまう感じがします。日本の文化、わびさびは日本語で伝えようと僕は考えています。落語を授業に取り入れることはいいことだと思います。落語を英訳したり、日本語の勉強として落語を覚えるその場合、簡単な落語の小噺になります。アメリカンジョーク的なものになります。生徒一人一人が皆の前で発表する形は面白いと思います。

IC: 最後に、SOISの学生に期待していること、または伝いたいメッセージなどがありましたらお願いいたします。

TH: 落語は処世術も入っています。人生のいろんな場面でこのように人間として行動すればいいんだよ。考えればいいんだよと教えてくれます。それが全てだとは思いませんがヒントはくれます。皆さんのこれからの人生にとっても有意義なものになると思います。勿論強要はしませんがどんどん落語に触れてください。

IC: Your visit this time was not at the request of school, but at your own suggestion, what was the motivation to do it?

TH: Last year I held a rakugo session at my eldest daughter's middle school. The response was very good and I enjoyed the experience. I was able to show this traditional Japanese performing art to them at the impressionable time of their early teens. Among the comments was many along the lines of "I thought rakugo was difficult but actually it was fun", and this reaffirmed my belief that rakugo can be enjoyed by all ages. This time, I made the suggestion to perform here at my younger daughter's school, so that others could experience rakugo at close quarters.

IC: How did you feel about the response of the SIS middle school students to your rakugo?

TH: It was very good. When one of the SIS teachers said to me "I'd like to be able to give lessons that the students can enjoy as much", I felt that maybe I had done something useful.

IC: Perhaps this is something you are often asked, but what made you make the shift to rakugo?

TH: It's a long story. Difficult really to put into words but...well, being able to do things like this in front of students is part of it.

IC: The story of "morning toiletries" (*chozu mawashi*) that you performed for us this time is apparently a very famous story in the *kamigata koten* rakugo repertoire. How do you feel about the new stories versus the classical ones like this.

TH: I am making some new stories, but the perfection of the classical rakugo stories is so good that I believe these are the ones to be exposed to first.

IC: At the end of the long homeroom session, you mentioned that you'd like to do something for the high





school students as well. Will it be possible for you to visit us again?

TH: Of course. Securing a spot in my schedule is difficult though.

IC: Are there any particular things that you like about SIS that you could tell us about?

TH: I think that it is wonderful how students study life can be so natural. I feel a little jealous when I think back to my own school days, which could have been much more enjoyable if I'd gone to a school like this.

IC: There are likely to be OIS students who would like to see some rakugo. Have you ever done any in English?

TH: There isn't any rakugo in English. That said, if you were to do rakugo in English I think it would lose something and just sound like a joke. Japanese culture...I think it should be communicated in Japanese. I think bringing rakugo into classes is a good idea. When translating into English and then remembering the Japanese as a way to study, simple rakugo can create short comic anecdotes that might come out a bit like western humour.

IC: Finally, is there anything that you would like to see SOIS students doing or a message to give them.

TH: Rakugo contains much about the way we live. At many times in life we may think that it is okay to act in a certain way, or to think in a certain way. It doesn't tell us everything, but I believe it can give us hints at least. I think it can provide something worthwhile for everyone's future. Of course, I won't force it on anyone, but I'd like people to expose themselves to rakugo as much as they can.



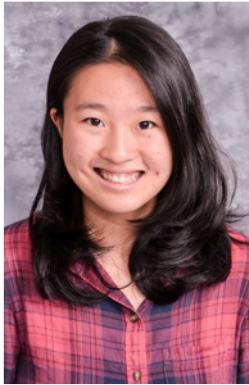
# 英検1級に4名合格

## Eiken

The following students have reported recent results on the Society for Testing English Proficiency's (STEP) Test in Practical English Proficiency (Eiken). Many people reported passing the exam this time (some of these results are for earlier exams); special congratulations to Yuki Kusanagi, Kana Matsumoto, Miki Fujito and Kotaro Minamiguchi, who passed the highest level of the test.

Rodney Ray  
SIS English

		No	Student Name	Level
10	2	7	Kusanagi, Yuki	1級 (Level 1)
10	3	12	Matsumoto, Kana	1級 (Level 1)
11	4	5	Fujito, Miki	1級 (Level 1)
12	1	9	Minamiguchi, Kotaro	1級 (Level 1)
12	1	9	Minamiguchi, Kotaro	準1級 (Level P1)
10	1	8	Iwasaki, Arisa	準1級 (Level P1)
12	1	2	Funamoto, Yuma	準1級 (Level P1)
12	1	3	Hanafusa, Rie	準1級 (Level P1)
12	1	22	Yoshikoshi, Ayano	準1級 (Level P1)
12	2	16	Omoto, Sohei	準1級 (Level P1)
12	3	1	Adachi, Haruka	準1級 (Level P1)
09	1	10	Nanjo, Mai	2級 (Level 2)
10	3	10	Maeda, Yamato	2級 (Level 2)
10	4	12	Osaka, Ami	2級 (Level 2)
11	2	3	Hirota, Kaori	2級 (Level 2)
11	2	19	Tsuji, Manami	2級 (Level 2)
11	4	4	Egami, Sosuke	2級 (Level 2)
12	1	18	Takashima, Kana	2級 (Level 2)
12	2	3	Hasegawa, Teru	2級 (Level 2)
12	2	13	Nakajima, Karen	2級 (Level 2)
12	3	17	Okazaki, Kirara	2級 (Level 2)
12	4	3	Inukai, Jotaro	2級 (Level 2)
12	4	14	Oh, Miki	2級 (Level 2)
12	4	15	Omori, Asuka	2級 (Level 2)
12	4	20	Yamaji, Rina	2級 (Level 2)



## NIE (Newspaper in Education) 基礎社会3

9年生の基礎社会3の一つとして、NIEの授業が年間通して週1時間あります。

NIE (教育に新聞を!)は新聞を読むことから始まる授業です。本来の目的は今の世界を広く知ること。そこでこの世の中で日々、様々な出来事が起こっていて特に新聞にはさまざまな情報があふれています。その情報から様々な学びを自主的にやる。

「こんな記事が載っていたよ」「このできごとについてはこう思ったよ」など、自分自身で記憶に留めたい内容がたくさんあるはずだと思います。

なにせ週1時間の授業です、生徒個々のがんばりがそのまま成果となります。(サボればいくらでもさぼることができるという恐ろしいことに)

しかし、例年、この授業で新聞を読みこなすコツを見つけ、大人顔負けの時事能力を持つまでに至るほどの成長を見せてくれる生徒も多数出るという、まるで個々の実力比べの様相を呈します。

\*4月から6月末は新聞に慣れ親しみさらに読みこなし、世界をはじめ日本の時事にしっかりと理解を深める。ことを目標に授業を進めます。

そして、日本新聞協会の、第8回「いっしょに読もう!新聞コンクール」に応募します。このコンクールは、新聞を読むことで(1)社会への関心の広がりを促す、(2)社会の課題への「気付き」を促す、(3)家族・友だちとのコミュニケーションを促す、(4)考えを深める姿勢を促す、(5)考えをまとめて表現する力を培う——ことを目的としたコンクールです。また、コンクールを通じて(1)新聞の面白さ、大切さを知ってほしい、(2)新聞を好きになってほしい——という願いも込められています。

このコンクールで昨年は10年生の草薙柚季さんに永橋風香さんが優秀賞などをとりました。例年、このNIE 授業では先輩たちが多くの賞をいただき、活躍を全国に知らしめてくれています。この9年生も必ずや例年以上の賞を総なめでできると信じています。

増尾美恵子

## 中国語検定試験

12年 王美紀が中国語検定試験を受けた結果、リスニングと筆記ともに平均点を30点程上回る高得点で見事2級を合格しました。2級では日常会話では出て来る事のない文学的の様な内容になりますので、このような成績を得るのはかなり難しいです。本当に良く頑張りました。

12年 池田 華はChinese Proficiency Test 中国漢語水平考試の最高レベル6級に見事合格しました。

12年 上村 青と 高田茉一帆共にChinese Proficiency Test 中国漢語水平考試の5級に合格しました。

更に高田茉一帆は中国語検定試験の3級も同時に合格しました。Chinese Proficiency Test 中国漢語水平考試の出題はもちろんの事、指令もすべて中国語で放送するテストなので、聞き取るのも大変だと思います。皆さんの努力で良い成果を得ることが出来て、嬉しく思っています。本当におめでとうございました。これからも引き続き皆さんのご健闘を祈ります。



# 重い扉を開いた日

人生にはいくつかの分岐点があるという。その分岐点に立った時どう行動するかで、人生は大きく変化する。私にとっての重要な最初のそれは、2017年3月4日に卒業した関西学院千里国際高等部だ。

私は中学3年生までは、日本の公立の学校に通っていた。幼稚園の頃に兄の影響で通い始めた英会話教室がきっかけで、英語と他の国の文化や人に強く興味を持つようになった。この頃からずっと私の将来の夢は英語を使って多くの人と交流すること、そして海外で働くことだった。人一倍熱い想いはあるものの、実際は学校で周りの生徒よりも英語が得意という訳ではなく、テストの点数は平均点程だった。

まだ志望校さえ決まっていなかった中学3年生の夏、母に連れられ何となく参加した学校説明会で、SIS という学校のことを知った。この説明会は質疑応答形式で進められる、いわゆる全員参加形式で、3人の卒業生がステージ上の椅子に座って学校生活や今後の進路など、参加者の質問に沿って話すというものだった。なんとなく説明会に参加していた私は、ただ時間が経つのを待って ぼーっと話でも聞いていようと思っていた。だが、不思議と話を聞いているうちに私が SIS 生として学校生活を過ごしているイメージが頭の中に浮かんだ。さらに、SIS 生活や将来について話す3人の卒業生がどこかキラキラ輝いて見えて、私もこうなりたいと思うようになった。この想いが強くなり、いつもならこのような場で発言をしなかった私が、自分から挙手をして質問していた。この行動には、自分でもそして母も驚いて今でも鮮明に覚えている程だ。

「海外経験も無く英語が話せなくても、英語の授業についていけますか。」

と質問した私に、

「“努力”さえすれば大丈夫ですよ。」

と一人が答えた。

「努力さえすれば大丈夫」この一言が私の心の底にある何か熱いものを刺激した。SIS には私が求めている、国際的な環境や自分らしさを出せる自由な校風、沢山の学校行事、そして私でも“努力”すれば夢に近づけるという希望を強く感じ SIS を受験し入学した。

私は10年生からの編入だったため、最初は転校生のような扱いだった。初めての学年全員との顔合わせの時には、編入生に対する歓迎の口笛や拍手に衝撃を受けた。今まで私が体験したことのないその雰囲気にとだだ圧巻された。いくら学年で仲が良いとは言っても中学校から SIS に通っている生徒達の間には、もちろん固定の友のグループが存在していた。ほとんどの生徒が幼稚園からの付き合いという環境で中学校まで通っていた私は、友達の作り方さえ分からず孤独感が増した。それに加え、学年の多くの生徒が英語や他の言語が話せたり、リーダーシップやスポーツなど何かに秀でていたりして私が学年の中で潰されてしまいそうで不安で焦った。当時の担任の田中守先生は「周りとは違うことをやれ。何か行動にしろ。」を口癖のように私たちに言っていた。ただ、不安で押し潰されそうなこの状況から抜け出したくて、毎日のようにアンスケには理科室へ行き田中先生のアフリカでのお話を聞いたり、将来について相談したりしていた。

そんな時、田中先生に TANGO というクラブを紹介された。このクラブは、OIS の生徒が中心となり活動する英字新聞を作成するクラブだ。クラブの担当は OIS の教員 Mr.Algie で、部員も当時は全員が OIS の生徒だった。クラブの中ではもちろん英語のみが使われる。私は、田中先生から TANGO のミーティングが行われているという部屋番号が書かれた紙だけを受け取った。私はびっくり、田中先生も付いて来て下さるのだと思っていたので戸惑った。さらには、TANGO の教室は私が行ったことの無かった OIS の教室があるエリアにあるという。そのエリアを歩く生徒のほとんどが英語を使っている、私は周りをキョロキョロと警戒するように見ながら歩いた。なんとか TANGO の教室まで辿り着いたものの、教室の扉は閉まっていた。扉の窓から中を覗くと既にミーティングは始まっている様だったが、なかなか扉を開けることが出来ずに外に立っていた。一旦、田中先生のところへ帰ろうかとも思ったが、不安で押し潰されそうな毎日と、「努力すれば大丈夫」「周りとは違うことをしろ。何か行動にしろ。」という言葉の思い出した。今逃げたら何も変わらない、何が何でもやってやろうと思い、その重い扉を開けた。教室の全員が一気に振り向き、一瞬教室内の時間が止まった様だったが、先生が笑顔で私を迎え入れてくれた。部員の皆も自己紹介をしてくれたりして私を歓迎してくれた。しかし、私は英語で自分の名前を言うだけで精一杯で皆が

私について質問してくれてもただ頷くか、笑うだけしか出来なかった。

6人1組のテーブルで KitKat を食べながら自由に話してミーティングをしたり、個々に作業を進めたりするのがこのクラブのスタイルだった。個人を大切にしてくれるこのスタイルは、部員のみんなには居心地が良さそうで本当

に楽しそうだった。ただ、当時の私にはこの環境が辛くて、毎週水曜日にあるこのクラブに行くことが憂鬱な時期があった。TANGO から逃げた時期もあった。そんな憂鬱な時期から救ってくれたのは、Mr.Algie や部員のサポートだった。特に Mr.Algie は毎回私の書いた記事を添削して、英語に不安がある私でも記事を書ける環境を作ってくれた。

毎週 TANGO に通うことが習慣になっていた高校2年生の時、「今の頼りっぱなしの状況ではダメだ。変わりたい。」という一心で vice-president に立候補し選ばれた。それは、私にとって大きな大きな挑戦だった。私が vice-president として TANGO に何か貢献できたのかは分からない。でも、vice-president に立候補したこと、2年間 vice-president を務められたこと、高校3年間 TANGO を続けてこれたことが私に大きな自信と勇気をくれた。そして、今の自分の状況を変える勇気と怖さを知れたから、高校3年間で他にも様々なことに挑戦し続けられた。例えば、高校2年生の時に立候補して務めた学年旅行の委員長や、一度は担当の先生に授業についていけないだろうからと言われて断られた英語の IB の授業も最後までやり切った。これらの全ての挑戦の裏にはいつも、先生方や仲間からの沢山の厚いサポートがあり、だからこそ全力で何事にも挑みやり切ることが出来た。

「努力さえすれば大丈夫」、「何か行動しろ」というこの2つの言葉は今では私の座右の銘だ。関西学院千里国際高等部に入学したことが、TANGO の重い扉を自分で開けたこと、この2つが私の人生を大きく変え、人生の視野を広げた。そして私は、8月からニューヨークの学校へ進学する。そんなこと、不安で押し潰されそうだったあの頃の私には単なる夢でしかなかった。でも、今はもう夢の話ではなく現実の話になった。だから、これを自信に変えて、これから始まる生活や環境に不安で押し潰されそうになった時には、2つの座右の銘を胸に進んで行く。ニューヨークの生活が次の私の人生の分岐点になるように。

奥田 珠生  
2017年卒業



# Class of 2017 - graduation



**R**everend Tabuchi, heads of school, principals, teachers, friends and family of the OIS graduating class of 2017, good evening and welcome to you. Thank you for being here to support and celebrate this great group of young people on this special night.

To the graduating students, thank you for inviting me to speak this evening. It is a great honor, and I sincerely appreciate it.

There's a famous movie, called *ET: The Extra Terrestrial*- I'm sure you've all seen it- and there's a quote from the movie that goes like this: *"You could be happy here, I could take care of you. We could grow up together."* This is what the main character, Elliot tells his alien friend ET.

This is a quote that maybe you will be able to relate to, because it doesn't matter whether you arrived here at OIS for kindergarten or at the beginning of your Grade 11 year, I think that you'll all agree that to some extent, your experiences here helped you grow as people.

Growth means learning new things. By coming here, some of you have learned new subjects. Some of you have learned new musical instruments. Some of you have learned new languages like Japanese, and Spanish. Some of you have learned the haka. Some of you have learned that the Big Bang did not, in fact, kill all the dinosaurs.

From Ms. Cheney you have learned about the origins of World War I. From Mr. Frater

you have learned the nuances of micro and macroeconomics. From Mr. Dupont you have learned that the universe must be finite or we would be flooded with the light of an infinite number of stars. From Mr. Stone you have learned the most irritating song in the world, that ghastly song that goes, *"How can I be sure, in a world that's constantly changing?"* After Mr. Stone played that song to us, some of you took a sadistic delight in torturing us by singing it to us over and over again....

Kento, please don't sing it again here tonight... or any night....

Hopefully you have learned, through your experiences of serving others in Bali on the "Balifam" trip and all your other volunteer experiences, that one of the most meaningful things you can do in the world is to make it better for others.

Many of the things you have learned have not been pleasant. Maybe you learned the loneliness of being homesick. Maybe you learned the sadness of having to say goodbye to a friend leaving for another school. I know that many of you learned the fear of experiencing an earthquake for the first time.

On the basketball court, on the volleyball court, on the soccer field, not only have you experienced the happiness of winning, but also the disappointment of losing. In sport, in academics, in your personal lives you have discovered how upsetting it is not to have all your hopes and dreams realized. I would argue

that learning this reality has helped you grow most of all. Life can be disappointing, scary and sad. ET and Elliot learn that, and learn that through friendship, self-belief and resilience, we can rise above each challenge and each heartache. I know your time here at OIS will have taught you something similar.

Another thing that you have learned here is how beneficial it is for people to have high expectations of you. Let me explain. I first met most of you on January 29, 2013. I was visiting this school for a job interview and I sat in on a class you had with Mr. McGill. You were learning about the short story *The Tell Tale Heart* and there was lots of class discussion about the reading. In fact, I was astonished at the participation. It is no exaggeration to say that during that class discussion, there were times when every single student in the class had their hand up to offer a thought. I think some of you had two hands up. I couldn't believe there was such a high level of enthusiasm to contribute. Of course, later on, I realized that the reason you all showed such engagement was that you had a healthy respect for Mr. McGill and the high expectations he had of you. He expected you to have your own thoughts. Have an idea. Raise your hand. Contribute your idea. Defend it. You have something to offer. No excuses. Tonight, as we send you out into the world, we need you to know that we all continue to have high expectations of you. Whatever situation you find yourself in, have your own ideas. Use



critical thinking. Raise your hand. Contribute. No excuses.... Mr. McGill will always be with you.

So, like ET, you've been able to learn new things, to grow up through your time here. The other thing the protagonist, Elliot tells his friend ET is, *"I could care for you. We could grow together"*. From everything I have seen, this is what you have been able to do here. You all grew, together, alongside each other. You learned to care for each other. You have helped each other and supported each other. It has provided so much richness in your time here and is one of the things that we celebrate with you tonight.

Of course, in addition to the help you have received from each other, you owe a great deal of thanks to parents, siblings, grandparents, extended family, teachers, coaches, your brothers and sisters from SIS, fellow dorm members and others. I know you know that you could not have come this far without their love and support. You had help. And remember, when you're feeling down, feeling low or feeling lost you can always, you must always ask for help. Help and assistance from new friends wherever you may find yourselves? Definitely. Professional help when you're feeling down? Absolutely. And don't forget us: old friends, your family, and your extended family here at this school. If you need us, give us a call. Like ET, you can always, always phone home.

We're about to say a goodbye, or at least, kind of a goodbye. It's like at the end of the movie, Elliot has to say farewell to his friend, ET. There will be some tearful smiles and heartfelt promises. The pain of the coming separation from each other. The spaceship is waiting out in the forest, warming up, ready to take you off, away from us, out into the galaxy. Metaphorically. Not literally (That would be crazy).

But before we send you out into that universe. Before we let you go, we, your teachers, your friends, your families want to tell you something. We want to tell you that in a world that is constantly changing, we can be sure that you each have the strength, and the character to keep growing, to keep learning, to keep contributing, to keep helping each other rise above the fears and disappointments, to keep asking for help when you need it, to keep making the world a better place, and to keep making us proud. Our reason, our intuition, and our faith- all our ways of knowing you- lead us to be absolutely certain of your potential. So, go with all our belief in you, and all our best wishes. Congratulations, OIS class of 2017. Thank you.

David Algie





## Board 執行部 [BD]

BDは各委員会と連携しながら、保護者会、学校、委員会、各学年、OISとの架け橋の役割を担っています。今年の活動テーマ、“Enjoy gathering～和と輪でつながろう～”を合言葉に、各委員、保護者のみなさまが楽しくSISPAの活動に参加いただけるように、また保護者間の親睦が深まるように尽力して参りたいと思います。みなさまのご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



## Network Committee

## ネットワーク委員会 [NW]

NW委員会は、保護者と学校、保護者同士のつながりをサポートし、学校生活を円滑に過ごせるようお手伝いをする委員会です。役割としては、SOISメールの利用をサポートします。ご利用に際して困ったことがあればご相談下さい。また、皆さまのお住いの地域を22のグループに分け活動している地域ネットワークをサポートします。地域懇親会では学年を超えた交流もあり貴重な情報源となっていますのでぜひご参加下さい。そして、学年委員として学年懇親会が円滑に進むように努めます。一年間、どうぞよろしくお願いいたします。



## Hospitality Committee

## ホスピタリティ委員会[HP]

HP委員会では、学校で開催される行事(スポーツ表彰式、春・冬の高等部コンサート、国内・国際招待試合、All School Productionなど)のティーサービスやパンケットサービスを行っております。サービスを通して、学生たちの活動を応援するとともに保護者同士や先生方との交流も深めて行きたいと考えています。より充実したサービスを提供できるよう、保護者の皆さまにはボランティアとして参加をお願いしております。行事に参加される皆さまに喜んでいただける、有意義で楽しい活動となるよう委員一同一生懸命頑張りますので、皆さまのご協力を宜しくお願い致します。



## Public Relations Committee

## 広報委員会 [PR]

PR委員会では保護者会ホームページの運営とインターカルチャの保護者会ページの記事の作成を中心に活動してまいります。保護者会の活動を広く皆さまにお伝えすることを目的とし、各委員会・学年からのお知らせや報告のほか、学校行事の様子を保護者の視点で取材し、写真やスライドショーなどを用いて掲載いたします。学校と保護者の皆さまのつながりをより深めるお手伝いができるよう、今年度も8名の委員で力を合わせて、身近で親しみやすいホームページ作りに努めてまいります。SISPAホームページをぜひご覧ください。

<http://www.sispa.jp/>



## International Fair Committee

## インターナショナルフェア委員会 [IF]

インターナショナルフェアは、SIS/OIS両校の保護者が協力し合い、生徒(卒業生)及びその保護者と学校関係者の親睦・交流を目的とし、行われるイベントです。今年度より、OISとの連携をより強固なものとし、SOISのIF委員会が一貫団結し、全ての方々にとって楽しい時間となるようなフェアを目指し活動していきますので、どうぞ協力宜しくお願い致します。

今年の開催予定日は11月18日(土)です。

